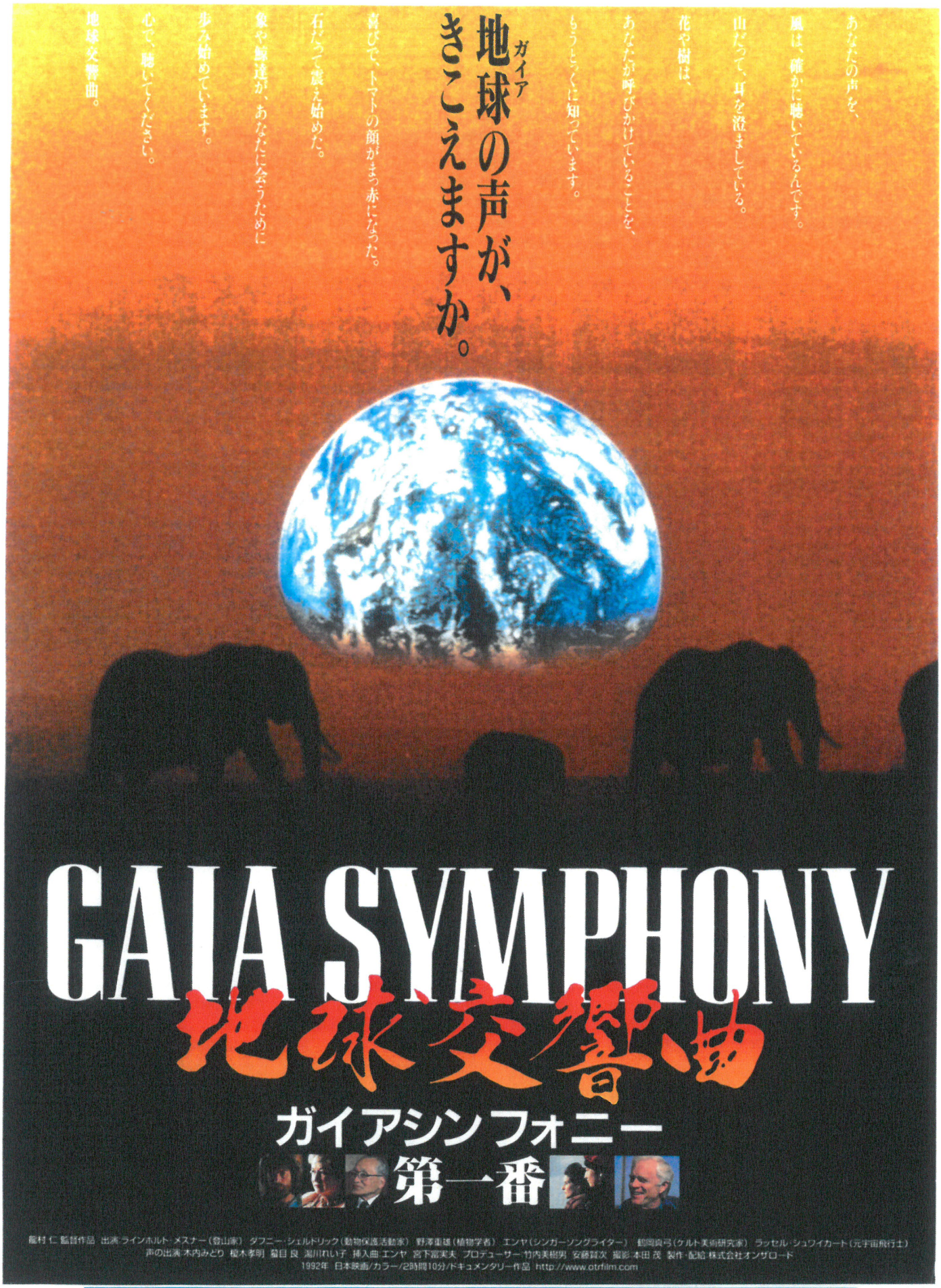

月山ビジターセンター３５周年記念事業(申し込み不要)

上映場所：月山ビジターセンター
上 映 日：１１月５日(日)・１２月２３日(土)・２４日(日)
上映時間：１１月５日(日) ①10:00～ ②13:00～
１２月２３日(土)・２４日(日) 10:00～
料　　金：大人５００円/中学生まで無料

地球交響曲

ガイアシンフォニー

もし、母なる星地球が本当に生きている一つの生命体である、とするなら、
我々人類は、その“心”、すなわち“想像力”を担っている存在なのかも知れません。
我々人類は、その“想像力”に依って科学技術を生み出し、地球の環境を大きく変えてきました。
現代の地球の環境問題は、良い意味でも、悪い意味でも、人類の“想像力”の産物だ、と言えるのです。
だとすれば、危機が叫ばれるこの地球の未来も又、人類の“想像力”すなわち“心”の在り方に依って決まってくるのです。
この映画は、21世紀の到来を前に、地球の未来にとって、極めて示唆的なメッセージをもつ世界の6人の人々のオムニバス映画です。
登場人物はいずれも、現代の常識を越えた事を成し遂げた人、あるいは体験した人達です。
今生きている我々ひとりひとりが、“心”にどんな未来を描くかに依って、現実の地球の未来が決まってくる。
映画「地球交響曲」が、全ての人々の“心”のための元気薬になれば、と願っています。 **龍村　仁**

ラインホルト・メスナー（登山家／イタリア）

頂上へのアタックを開始するときの到来を、メスナーはいつもその「少女」との対話の中で統る。方角を見失ったときも、脱出ルートを探すときも、その「少女」はいつも側に現われる。酸素ボンベも無線機も持たず、たった一人で登るメスナーにとって、その幻の少女だけが、唯一の、真のパートナーだ。
ラインホルト・メスナーは世界で唯一人、単独で世界の八千メートル級の山全てを登り尽くしたアルピニストの王者。そのメスナーが、臨死体験や人間の生命力の限界について語る。

野澤重雄（植物学者／日本）

「トマトは心を持っている。私は、そのトマトの心にたずね、トマトに教わりながら、成長の手助けをしただけなんです。」
たった一粒のごく普通のトマトの種から、バイオテクノロジーも特殊肥料も一切使わず、一万三千個も実のなるトマトの巨木を作ってしまった野澤重雄さんはそう語る。
この映画では、トマトの種植えから一万三千個も実のなる巨木に成長するまでの過程を克明に記録しながら、野沢重雄さんの、科学の常識では理解できない、トマトの生命哲学を聞く。

ダフニー・シェルドリック（動物保護活動家／ケニア）

体高3メートルを越える巨大な野生のアフリカ象と一人の人間の女性との間に「言葉」を超えた深い愛情と信頼の関係が今も続いている。ダフニーはアフリカのケニアで、象牙密猟者のために親を殺された象の赤ちゃんを育て、野生に還す活動を過去30年以上続けている。エレナは、ダフニーに初めて育てられ、野生に還って行ったメスの象。今、小象に野生で生きる知恵を教えている。ダフニーとエレナの感動的な再会のシーンを中心に象の社会から人間社会へのメッセージをダフニーが伝える。

鶴岡真弓（ケルト美術研究家／日本）
エンヤ（歌手／アイルランド）

神話と妖精とケルト遺跡の島、アイルランド。そのアイルランドから聞こえてくるエンヤの歌声は、我々の魂の奥底に眠っていた遠い記憶を呼び覚してくれる。その神秘的な歌声には、自然の全ての現象に神が宿ると信じた古代ケルト民族の宇宙観が宿っている。
エンヤの歌声は、我々を異界の海へと誘う幻の小舟。水先案内人はケルト美術研究家の鶴岡真弓。エンヤの生まれ故郷アイルランド北端の小さな村を出発点に、アイルランドの自然とケルト遺跡を訪れる幻想の旅。

ラッセル・シュワイカート（元宇宙飛行士／アメリカ）

アポロ9号の乗組員だったシュワイカートは、ある不思議な体験をした。その体験は彼の人生観を大きく変えてしまった。宇宙の完全な静寂の中に一人取り残された時のことだった。
「ここにいるのは私であって私でなく、眼下に拡がる地球の全ての生命、そして地球そのものをも含めた我々なんだ」
人類はナゼ宇宙に向かおうとするのか？人類の宇宙進出と地球の未来をどのように両立させることができるのか？アメリカの元宇宙飛行士が科学技術の最先端で理解した生命観を語る。

ガイア シンフォニーを共に奏でる仲間たち。

●地球が誕生してからの何十億年もの時間は、生命体を何百万ものフラグメントに分化させていったが、今、それらが結局はひとつの大きな生命体を構成する各部分であるという事実が明らかになってきている。『地球交響曲』はこうした流れを様々な光によって照らしだしながら、自らも増殖し、生命体化しようとする不思議なポリフォニーのように思える。
伊藤俊治（美術評論家）

●今年の春、精神的にどーっと落ち込んでいた時、私のマネージャーの女性が「『地球交響曲』という映画をぜひ見ろ!!」と勧めてくれました。彼女は最初の試写会でこの映画を見た時、涙が止らなくてそして心が洗われた気がしたそうです。
それから随分たって、私もようやく、この映画に出逢えました。美しい映像と音楽、そして、なによりも真実のもつパワー、そして、それら全てを愛して作品を撮り続ける龍村さんの情熱が、静かに、だけれど、深く、強く、体の中にしみ込んでくる様でした。
静かに考えさせてくれる作品です。この時期に、この映画に出逢えて本当に良かったと思っています。自分自身の気持ちが素直に正直になれた時、その度に、また新しい発見があるのではないでしょうか。
今井美樹（歌手）

●この地上には、さまざまな事柄に挑戦している人々が、それは無数にいることだろう。この映画はそうした人々に大きな勇気を与えてくれるに違いない。われわれは必ずどこかで結びついているのだ、美しいガイアの胸に抱かれて……
植島啓司（関西大学教授）

●地球は一個の生命体であるという意識が随分前から有りました。水も木も空も土も、そして自分もその一部であると。
国境も隣との境も人間のエゴが引いた線でしかなく、民族、人種、国家、宗教、その壁が取り払われ意識が一つになった時のことを私は知っています。人間は無限の可能性を秘めた存在であることを知っています。
そして、それを教えてくれるのが、この「ガイアシンフォニー」です。 **榎木孝明**（俳優）

●「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない！自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する」と予見したのは、1926年の宮沢賢治であった。その彼が『地球交響曲』を観たら、自分の予見がけっして間違っていなかったことを喜びと痛みをもって思い知るであろう。
鎌田東二（宗教学者）

●象が射たれたその瞬間、私も射たれたのでしょうか。
この映画を観て以来、身辺の不思議に気づきます。そして、どこの国のどの人もどの動物もどの植物も、命あるもの全ての輝きが感じられるのです。 **木内みどり**（俳優）

●この作品のとりこになってしまった一人です。いったい何回見たのでしょうか。回を重ねるごとに、感動は深まります。混邪として先の見えない時代に、すがすがしい希望の光を見いだす思いがします。人間、生命、地球、宇宙、神、愛、こころ、永遠――そんな根源のテーマに取り組んで、すばらしい人々にであった龍村仁さんが、うらやましいですね。
下村満子（ジャーナリスト）

●龍村仁の作品には、つねに二つの力が共存している。知性と、野生だ。あるいは宇宙的な眼と、自然。この両極の力がシンフォニーとなり、龍村仁の映像に比類のない美しさと躍動感を生みだしている。「地球交響曲」はその見事な達成であり、わたしたちの次なる世界観を映像で示したものだ。 **宮内勝典**（作家）

●本来、創造することの喜びとは、宇宙とリンクした、こんなにもダイナミックなものであり、生きる喜びそのものだったのに、私は随分と長い間、そのことを忘れていたみたいです。龍村さん、思いださせて下さって、ありがとう!! **湯川れい子**（音楽評論家）